報　告

環境シンポジウム—さらにゴミを減らすために

環境シンポジウム

さらにゴミを減らすために

― 新たな循環社会をめざして ―

平成１７年度の久留米市のごみ処理量は、２年連続して減少。リサイクル率は２割を超えました。これは、ひとえに市と市民の努力によるものです。

久留米市ではこれまでも各種生ごみ処理機の普及の支援を行ってきましたが、今年から生ゴミ減量のために環境部リサイクル政策室の呼びかけで、市民による段ボールコンポストの取り組みが始まりました。小学校でもダンボールコンポストの取り組みや、生ごみを腐葉土と混ぜて堆肥化し、花壇づくりや野菜づくりが行われるなど、学校教育の現場でも食育が進められつつあります。このように、今、市を挙げて生ごみ減量の機運が高まりつつあるのは大変喜ばしいことです。

さらにゴミを減らすために、ゴミ減量をテーマに下記の通りシンポジウムを行います。お誘い合わせの上多数ご参加ください。

記

とき……10月7日（土）　13:00　受付　13:30～16:00

ところ……久留米大学御井学舎　メディアセンター81A教室

プログラム

挨拶・趣旨説明……福田洋一（市民オンブズパースンくるめ）

司会・コーディネーター……駄田井　正（久留米大学経済学部）

1．パネリスト報告

① 生ゴミで元気野菜づくり……白仁田裕二（くるめ大地といのちの会）

② 久留米市のゴミ減量について……吉田　茂（久留米市環境部リサイクル推進室）

③ 「ゼロウェイスト」について……石橋　剛（久留米市議）

④ 大木町が目ざす循環のまちづくり……境　公雄（大木町環境課）

⑤ 世界のゴミ処理の流れ……河内俊英（久留米大学医学部）

2．パネルディスカッション

3．質疑応答

共催：久留米大学産業経済研究所筑後川プロジェクト、筑後川流域連携倶楽部、筑後川まるごと博物館、久留米の自然を守る会、筑後川水問題研究会、くるめ大地といのちの会、ゴミ問題連絡会、筑後川の水源を守る会

司会者：皆さんこんにちは。本日は久留米大学経済産業研究所筑後川プロジェクト，並びに7つほどの市民団体共催のシンポジウムにたくさんご参加いただきましてありがとうございます。またパネラーをお願いいたしましたみなさんには快くお引き受け頂き，ありがとうございます。心からお礼申し上げます。

久留米市のゴミ処理量はここ10年間連続して減少し，リサイクル率も2割を超えていると報じられていますが，これはひとえに市当局，また市民の努力によるものであります。これまではゴミ処理というのは全べて燃やしたり，埋めたりされておりましたけれども，気がついてみたらいたるところに焼却場ができる，埋立地ができるということで，周囲の環境が汚染されるといった問題も生じています。これではいけないというようなことで，なんとか　次の世代によい環境を残さなければならない，そのためにどうしたらいいのかということで，様々な試みがなされています。また市民と行政が一体となってゴミを減らしていくという努力もさらに求められているというわけであります。

本日は様々な立場の方にそれぞれの取組をご報告いただき，その後パネルディスカッションを行います。会場の皆様からも忌憚のないご意見を頂いて，これからのゴミ問題，特に生ゴミ処理をどうするか，生ゴミをいかに減らしていくかということについて市民・行政が一緒になって考えるという機会にしたいと思っております。

いろんな立場，いろんなやり方で考え方も違いますし，取り組み方も違いますが，ゴミを減らさなければならない，ゴミを減らしたいという気持ちは同じであります。どうか，ご参加のみなさんの率直なご意見が交わされますようにご協力をお願いいたします。

詳しくはこの後のご報告の中で自己紹介していただきますけど，簡単にパネリストのご紹介をさせていただきます。

発言順にいきますと，まず最初に「ゼロウェイスト」についてご報告していた

だきます，石橋剛さん。久留米市の市会議員で環境問題，ゴミ問題に強い関心を持っておられます。議会でもたびたびご提言をされております。本日は行政と市民が一体となってゴミを減らすゼロウェイストの必要性についてお話をしていただきます。

次は久留米市のゴミ減量についてご報告を頂きます，吉田茂さんは久留米市環境部リサイクル推進室長さん。行政マンとして日夜ゴミの減量に取り組んでおられます。久留米市は生ゴミ処理機，ダンボールコンポストの推進，様々な生ゴミ処理，リサイクルなどに取り組んでおられますが，こういったごみ減量の現状，これからの取組についてお話を伺います。

三番目には「生ゴミで元気野菜作り」についてご報告を頂きます白仁田裕二さん。くるめ大地といのちの会代表で市内広又で経営されております「まんまる」というレストランで発生する野菜くず，そういったものを有機肥料として土に戻し，自らがおいしい健康な野菜を作ってお店に出しておられます。生ゴミを資源として活用し，健康な野菜を作って食べるという循環を自ら実施されております。

４番目に「大木町が目指す循環のまちづくり」についてご報告していただきます境公雄さん。大木町の環境課の職員で，大木町がすでに実用段階に入ってます生ゴミとか屎尿を微生物を利用して処理して，発電とか有機肥料にする事業に長年取り組んでおられます。これも全国的に有名になりつつありまして，今日のご報告はこれからのゴミ処理のありかたについて大変参考になると思います。

最後は「世界のゴミ処理の流れ」についてご報告いただきます河内俊英さんです。久留米大学医学部の助教授で環境問題に熱心に取り組んでおられます。国内はもとより海外の先進国も数多く視察されてゴミ処理の問題にも大変詳しく，著書もたくさん出されています。

司会とコーディネーターをしていただきます，久留米大学経済学部教授の駄田井正先生です。幅広い人脈と行動力で筑後川流域の経済文化の交流，活性化に熱

心に取り組んでおられます。環境問題についても大変お詳しい方で，本日は多才なパネラーの持ち味を上手く引きだして，活発なディスカッションが展開されることを期待しているわけでございます。よろしくお願いいたします。

それから，最後にアンケートのお願いがございます。私どもは今後もこういうシンポジウムをまた続けていきたいとおもっていますので，参考にさせていただきますからアンケートをお願いしております。是非ご感想をご記入のうえ，帰りがけにアンケートボックスに入れてください。よろしくお願いいたします。それでは駄田井先生にマイクをお渡しいたします。

駄田井：それでは司会の駄田井でございます。今からだいたい150分，4時ころまでパネルディスカッションをしたいと思います。最初に5人の方に10分くらい話をしてもらって，その後いろいろ簡単なやり取りをして，そして，休憩ということにしたいと思います。そして10分の休憩の後に皆様の活発なご意見をお聞きして，そのご意見を中心にまたパネリストの中で議論をやらせていただくというような順序でやりたいと思っております。なにせ150分という短い時間ですが有効に使って実りあるディスカッションにしたいと思っております。

さっそくそのパネルディスカッションに入るわけですけど，その前に資料とレジュメの確認をさせていただきます。アンケートのほうが1枚あります。「くるめ大地といのちの会」活動の全体構想ということで留めてる資料がございます。これには白仁田さんの発表の内容のレジュメです。それから久留米市の環境を掘り下げる，吉田さんの発表レジュメが1枚ついております。欧米のゴミ処理の中でということで河内さんのレジュメが2枚裏合わせのコピーでついております。次に直接シンポジウムで話されるわけではないんですけれども，IT化，コンピュータ処理システム，ビジネスモデル開発というのが出ております。これは簡単に説明させてもらおうと思ったのですが，今，ゴミの収集というと，生ゴミを街角に

並べていますが，これは非常に衛生状況も悪いし，それから空気にもよくない。これはどうにかして減らせないかというアイディアがゴミ処理を共同で行う。生ゴミ処理機も大きいと高いが，それを共同で使う。それに誰もかれもそれにゴミを捨てたら困るので，カードとかITを活用して，誰がどのゴミを捨てたかを分かるようなシステムづくりをする。そしてその生ゴミ処理を共同でするのであれば，その生ゴミ処理は集めなくてもいいということです。そういう共同処理のシステムを考えるということです。生ゴミだけではなくてビンなんかでも，スクラップできるようなビンだったらこれもできるだろうし，色々と新聞とか圧縮できるものは圧縮してできるのではないか。ITを使って街角にゴミをためておくことがないようにということが，そもそものアイディアでございます。

その次に地域通貨の説明がコピーで2枚ございます。これは地域通貨についてわりと詳しい説明がございますので読んでいただきたいと思うのです。私が関わっております筑後川流域連携倶楽部が環境と経済のために地域通貨カッパマネーというのを発行しております。そこで受付しておりますが，このカッパマネーという地域通貨使えるところはお店の一覧があります。このカッパマネーを持っていくと，1カッパが100円なんですが3種類の通貨がありますが，これを持っていくとこういうところで使えます，そのまま使えます。100円で通用します。10枚で1000円で通用します。これはどういうことで環境問題に関係あるのかといいますと，例えば10カッパ持って買い物行ったときに，買い物しますと協力店がカッパを我々のところに送り返していただきますと，最大10パーセント引きで現金化します。ということはカッパマネーを使うことによって10パーセントは活動費になるんです。そして10パーセント引きを今度は，例えば河川を掃除したりいろんな山の植樹をしたりというボランティアをしてる方に10パーセントの中の地域通貨でカッパマネーをおくると。そういう仕組みであります。そういう意味でこれを買っていただくこと自体ボランティアの推進ということになりますので，今日

も取り扱いしていますのでよろしくお願いいたします。これはいろんなところで使えます。白仁田さんのところでも使えます。今日終わった後にカッパマネーを使っていただければありがたい。そういうものであります。それから大木町のくるるんおおき循環センターというパンフレットがありますね。大木町の有機資源環境事業という色つきのが1枚あります。それからゼロウェイスト政策担当者へのインタビューという4枚つづりのが，これは石橋議員が説明される資料だと思うんですけれどもあります。最後に，カナダ循環型講演会のご案内というのがございます。これはカナダから日本に来られて，13日にあるんですけど，こういう講演会がありますので，興味ある方は来てくださいというご案内です。それから筑後川新聞というのを置いておりますのでよければ見てください。

それではこれからディスカッションに入りたいと思います。最初に石橋議員からゼロウェイストについてお話を聞きたいと思います。

石橋：みなさんこんにちは。只今紹介頂きました石橋剛と申します。

今日はこのパネルシンポジウムにお招き頂きまして，この様な機会を与えていただいたことに，お礼を申し上げます。それでは「ゼロ・ウェイスト」について私が勉強したことを皆様にご報告というかご紹介をしたいと思います。

21世紀の廃棄物政策は，「経済性」「地域性」「雇用」「資源管理」「気候変動」と言う広い観点から考えなくてはならない問題であります。このような観点から考えた場合，ゴミを燃やせばいいという簡単な処理方法ではなく，「ゼロ・ウェイスト」に取り組むことが世界の流れではないかと思っています。「ゼロ・ウェイスト」では明確な達成目標を設定して，焼却，環境負荷を減らしながら具体的にゴミを出さないようにすることであります。「ゼロ・ウェイスト」の三大目標は，有害物質を出さない，大気汚染をしない，資源を無駄にしない。この三つが重大な目標です。「ゼロ・ウェイスト」を推進する為には，皆様はご存知だと思いますが，「3・R」を推進すること，その為には「4・L」を提唱しております。

この4・Lというのは後ほどお話したいと思います。

この「ゼロ・ウェイスト」というのは何から始まったかというと，日本の企業が一時期「TQM」の最高栄誉であった「デミング賞」，これは優れた経営者に与えられた賞ですが，連続して受賞していた頃に生れたテクノロジーである。「Z・D（ゼロ・デフェクト）」計画にその起源を発しています。この手法を取り入れたゴミ政策であります。これから発生して今では，オーストラリアの首都キャンベラ，ニュージーランドの50％を越す自治体，カルフォルニアのサンタ・クルーズ，カナダのトロント等の自治体で現在進行中のゴミ処理システム構築に応用されています。この「ゼロ・ウェイスト」の基本的な考え方というか背景にあるのは，宇宙循環の哲理に根ざした地球再生の深いエコロジーを主張する未来思考の世界観を内包しているからです。自然界にはゴミはないということであります。ゴミは派生しません。と同時に焼却も。「ゼロ・ウェイスト」ではいつまでにゴミをゼロにするかという目標設定を明確にいたしますと，同時に焼却の埋め立ても不要になる完全リサイクルを目指しているところでございます。仏教の教えの中にもありますけれど，地球の中にはゴミも廃棄物もない。循環しているわけですね。私たち人間がゴミを出している。不要物を作っている。後ほど申し上げますけれども，そういう哲学というか思想的なことからこれが始まっています。それではゴミを燃やさず埋め立てずゴミをゼロにするということが出来るのかと，皆さんも行政も誰でも思っていらっしゃると思います。日本のゴミ処理の現状を見ればその通りかもしれません。しかし，世界中の自治体が，50％，70％，将来的には100％目指して短期，中期，長期の目標を立てて取り組んでいるところがたくさんあります。たとえ5年先に中間目標の50％を立てて30％しか出来なかった時に，この20％出来なかったのを非難するのはナンセンスであるという考え方です。なぜ30％しか出来なかったのか，次に20％をどのようにしてクリアするか。という手法を「ゼロ・ウェイスト」ではとっているのです。ですから出来なかっ

たことを非難し，責任を追及するよりも出来なかったのを次にトライするというのが「ゼロ・ウェイスト」の大切な手法でございます。

それから焼却を中心としたゴミ処理政策には，重大な三つの大欠陥があります。

まず第一点で大気の汚染であります。フィルターの性能が高いほど毒性が凝縮されて埋立地排水の汚染は拡大されて，世界的に重大な問題になっております。いくらフィルターの性能がよくても必ず飛灰の中に原素という形で飛んでいってしまいます。どんなフィルターで濾過しても飛んでいってしまうと，重金属類が大気中に汚染されるということであります。二点目はCO2の問題。二酸化炭素ですね。これは大量に発生します。焼却炉からです。産業革命以来8000億トンの炭素ガスを地球は蓄積しています。毎年250億トンの二酸化炭素を発生させており，増産しております。京都議定書の議長国である日本が削減するのではなく，まだまだ二酸化炭素を増やし続けているということも私たち日本人は考えなければならない点ではないかと思います。

三点目の欠陥としては労働効率から資源生産性を重視する方向ですすんでいるということであります。エイモリー・ロビンスとヴッパータール研究所の指導で始まった「アフター10クラブ」，こういう言葉を皆さんご存知だと思いますけれども，一つの資源で十の効果を得る。有効に資源を使おうということです。それから自然界には，先ほど申し上げた通り廃棄物はありませんので，ゴミが反対に資源の宝庫である。この資源の宝庫を燃やして灰にしてしまうのはどうか。資源を何回も何回も使っていく。人間というのは150年200年300年で存在が終わるというわけではありません。永遠に人間は存在し続けていかなければならないものであります。そのためには，有限である資源を，38億年かかって地球上に蓄えた自然資本をこの200年で使い果たそうとしているというのが今の世界でございます。ですから循環型の社会を構築しなければならないというのがこの今回の「ゼロ・ウェイスト」の考え方であります。

この焼却炉の3つの大欠陥の他に問題点があります。非常に高いコストでございます。これが150億，200億1機にかかるということ。ましてランニングコスト，修理費，それでだいたい久留米の予算で3億弱，2億何千万だと思います。そういうものを作るよりも「ゼロ・ウェイスト」という考え方のもとでゴミを回収して資源として活用していくということが非常に安価なたやすい方法ではないかと。それから，焼却炉で「サーマルリサイクル」というのがありますけれども，これも発電量からすると10%，せいぜい25%の熱効率だといわれております。たとえ25%の熱効率だとしても75%の熱を放出している。そんなばかなことはないのではないかと思います。これも例えば25%の熱を取ったって，そのくらいの電気量の削減はアルミ缶を回収する。アルミ箔の回収率を上げるだけで，それくらいの電気量というのは回収できます。億もかけて発電する必要はないと考えております。またそういう焼却の欠点というのは，燃やす材料がいります。炉はだから一度火をつけたらなかなか消せない。連続稼動でございます。その時には燃えるものを集めなければならない。「ゼロ・ウェイスト」では後でも述べますけれども，小さな区域でゴミ処理をやりましょうという考え方があるのですけれども，広範囲からゴミを集めて燃やすものを常に確保しなければならないということで，反対にリサイクルを高めようとするのを，反対に燃やすものを増やさないといけないという矛盾が生じております。この点は非常に私は疑問に思っております。それから，今燃やしている範囲でも，生ゴミなんかも燃やしていますけれども，一番熱源が高いのは，ポリ缶というかジュースのはいっている容器ですね。塩化ビニールとか。高温になるから燃やしております。ジュース屋さんの処理をなんで150億，200億もかけたので処理しなければならないのか，というのが非常に疑問に思っていることでもあります。やっぱり200億かけて後始末をするのに燃やし続けるというのは納得がいかないと思っております。

それから「ゼロ・ウェイスト」ではですね，「3・R」を実行するためには「4・

L」ということを言っております。「4・L」というのはローカル，ローコスト，ローインパクト，ローテック。これはどういうことかというと，ローカルというのは，その地域で処理しなさいということ。例えばローコストというところで触れるんですけど，市民参加はあくまでも自分の玄関先に廃棄物を出す。また，今我々街角で出していますよね。そこまでが市民参加です。そこから先は，ハイテク，バイオテクを使った回収センターを地域ごとに作っていくというのが大切です。広範囲にゴミを集めると分別が出来ませんので，久留米の市内の中だったら5箇所。田主丸，北野，城島，三潴で1箇所ずつくらい資源回収センターを作るのです。ただし資源回収センターには久留米市環境部あたりが，団塊の世代の人たちでもいいんですけれども，来年から団塊の世代がUターンして入ってきますけれども，そういう方たちを教育というか勉強して頂いて，ライセンスを与える。そういう方たちに資源を選別してもらい，それをお金にかえる。利益は市民に還元するというようなシステムを取り入れたらいいのではないかなという風に私なりの解釈をしているところです。

それからローコスト。これも費用がかからないような，何億円というのをかけるよりも，そういう回収センターを何箇所か作れば非常にコストがかからない。ニュージーランドでは廃材でそういうセンターを作っている。皆さんのお手元にニュージーランドとキャンベラの担当課の人のインタビューを載せておりますけれども，これを読んでいただければ，今私が述べたことが非常に難しいように感じるかもしれませんが，目標を設定していけば，意外と簡単にやっていけるのではないかなと思っております。

それからこの「4・L」を皆さんと一緒に議論しながらやるということが大切です。まとめさせていただきますけれども，「ゼロ・ウェイスト」というのは単なるゴミ政策ではないということ。21世紀の新しい世界観に繋がる地球再生の道を探るのだということを。これが非常に地域社会に波及効果があるということを

皆さん知っていただいて，私の簡単な「ゼロ・ウェイスト」に対するご報告は終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

駄田井：どうも，ありがとうございました。まだまだおっしゃりたいことがあると思いますが，一応時間の関係で区切らせていただきます。

ゴミ問題のときに私はいつも考えるのですが，ゴミを処理するのに高額なお金を使ってるんですね。だからリサイクルしなくてはいけないという意見もございますけど，私はむしろ逆にゴミを出さないためにゴミ処理に使ってるお金と同じくらいのお金を使ってもいいのではないかと。結果的にゴミを出さなければいいのではないかと。清掃車はものすごくお金いりますよね。だから清掃しないために清掃車にいるお金を使って清掃がないようにしたほうがよっぽどいいのではないか。やっぱりそういう意味で私はゴミを出さないために金を使うのはいかんというのではなくて，どんどんお金使うべきだと，同じお金を使うのであれば，ゴミを出して処理するのにお金を使うのがいいのか，ゴミを出さないためにお金を使うほうがいいのか，どちらのほうがいいのかという選択であります。まさにものすごい労力を使ってゴミを出さない努力をすべきだと思います。そこにゼロウェイストの意義があるのではないかと思います。続きまして久留米市のゴミ現状について吉田さんにお願いしたいと思います。

吉田：久留米市役所の環境部のリサイクル推進室の吉田茂といいます。名前だけは人の３倍くらい有名だと思うのでよろしくお願いしたいと思います。私のほうから久留米市のゴミ減量リサイクルの取り組み状況についてご報告させていただければと思っておりますけれども，その前に少しだけ，なぜゴミ減量が必要なのかというのをあえて言わせていただきたいと思います。

今全国でゴミが排出されてますけれども，平成16年度のデータで約５千万トン。

これは一般廃棄物です。工場等から出る産業廃棄物は別に4億5千万トンあります。一般廃棄物だけで約5千万トン。東京ドーム136杯分です。ものすごいゴミの量が発生しております。一日一人当たりに直しますと1086グラム。約1キロですね。久留米市でも年間に10万トンのゴミが発生しております。それを処理している。そういう関係で全国どこでも埋立地が不足しているとか不法投棄が非常に増えてるとか，そういう話があるわけです。それが一つです。

二点目はゴミ処理には先ほど石橋先生のお話にもございましたけれども非常にお金がかかるということです。ゴミの収集，運搬，焼却，埋め立てという形で，さらにはリサイクルのためにもお金がかかります。久留米市は年間38億から39億円くらいかかっています。1トンあたり3万8千円強お金がかかるということで，思った以上にお金がかかっているということを実感いただけるかと思います。これも市民の皆様方の税金でまかなわれていますので，そういう意味ではこういうのを下げるのも大きな要因だということです。

もう2点は地球温暖化の問題です。皆さん方最近よく耳にされるかと思いますけれども，二酸化炭素が増えて地球の温度が上昇しています。そのおかげでいわゆる異常気象が起きたりとか，あるいは海水面が上がるとかいろんな問題が発生しております。皆さん方が実感されるのは例えば台風の大型化の問題ですね。そういったものについては昔はこんなに大きな台風はなかったなとか，特に今年は大きな台風が来て被害が出ています。そういう問題も二酸化炭素と関係が出てきます。と申しますのはゴミを焼却すれば当然二酸化炭素が放出されますのでゴミが減れば温暖化の防止にもつながります。もう一点は地球の資源は限られていること。特にエネルギー，鉱物資源，市民資源いろいろございますけれども，一つだけ申しますと石油です。石油はあと40年しかもたないと言われております。だからここにおられる皆さん方が生きている間に石油がなくなるかもしれない。大きな問題です。そういう意味でも資源を大切にしないといけないと思うんですけ

れども。こういうことを考えますと，これからの循環型社会の構築は大命題だと考えます。私たちの生活は非常に便利になりました。でも大量生産大量消費というものの流れの中で，一方では大量のゴミを排出してきたということで次の世代に良い環境を引きついで行くためには，循環型の社会をつくって行くことが大切です。そうなりますとゴミの減量と非常に密接な関わりがあります。

そういう意味で久留米市ではこれまでゴミ減量の取り組みを一生懸命やってきたということでございます。そのことについて簡単にご紹介させてもらいます。資料の２枚目の裏側にグラフがあるかと思います。久留米市のゴミにつきまして平成４年以降という形で表させていただいてますけれども，久留米市ではゴミを減らすために，これまでいろんな取り組みを進めてまいりました。まずは平成10年までがひとつの流れでございますので，それまでを説明させていただきますと，平成５年にゴミの減量を進めるために家庭系のゴミ袋の有料化をしています。今も値段は一緒ですけれども30リットルの大きな袋で25円，18リットルの小さな袋だと15円というゴミ処理手数料を頂いています。これはゴミの減量化とそれからもう一つはゴミを出された量に応じて手数料を頂きますという取組です。二点目はゴミの搬入手数料です。上津クリーンセンターに直接ゴミを持ち込む場合の手数料ですね。こういったものを改定させていただきました。それから平成９年には事業系ですね，例えばスーパーマーケットとか，レストランとか，ホテル，あるいはオフィス。こういうところから出るゴミの処理について，これも指定袋を導入させていただいてます。さらには粗大ゴミについても有料化させていただいています。それからゴミを減らすためには出さないということと，もう一つはリサイクルするということと二つの方法が非常に有効です。そういう意味でリサイクルを進めていくために平成10年から17種分別を導入しています。それから平成10年には同時に，ゴミの排出については市民の方々のご協力がないとなかなかうまく行かないということでそれぞれの校区に分別推進委員さんを登録していただ

きまして，それぞれの地域でゴミの集積所の管理をしていただいております。そのほかにも，小学校とかPTAとか自治会とかで，資源回収活動をしていただいたり，生ゴミ処理機に対する助成制度とか，いろんな取り組みをさせていただきました。

そういった取り組みのおかげで，家庭系のゴミについてはグラフを見ていただくと分かるのですが，平成4年から平成10年の間に7万1千トンから4万7千トンに大幅に削減をしていただいているところでございます。近年につきましては家庭系のゴミ，上から2番目のラインですけれども，横ばいから若干減少傾向でございます。一方事業系のゴミ。先ほど申し上げましたようなスーパーマーケット，レストラン，オフィスビル，そういったところから出るゴミについては手数料改定とか事業系のゴミ袋の導入に応じまして一回は減ったんですけど，平成9年以降6年間連続して増加をしてきたというのがこれまでの経過でございます。そういう事業系のごみが増えてきたことをうけて，平成16年度に「ごみ減量緊急宣言」というのを出しました。というのは上津クリーンセンターという焼却工場がありますけれども，ここで燃やせるゴミの量というのは日量で240tくらいです。この平成15年当時，久留米市の上津クリーンセンターに持ち込んでいるゴミの量は約230トン。ほぼリミットです。こういうことからもゴミをへらさなければ，ゴミも燃やせないということでごみ減量緊急宣言を出しまして，市長先頭に久留米市内の大きな事業所を訪問してリサイクルへのご協力をお願いしました。特に古紙，事業所からでるゴミを調査分析しましたら，非常に紙の混入が多いということで，まずゴミの減量をまっさきに考えた時に何が一番効果的か。古紙にスポットを当ててリサイクルをすることが重要と考え古紙のリサイクルを促進していただくように要請をした。古紙のリサイクルをするためには古紙問屋さんのご協力だとか，収集運搬関係の業者の方々のご協力をいただきながら進めていきました。また，それと併わせて平成16年の11月には上津クリーンセンターで「古

紙の搬入拒否宣言。」古紙は上津クリーンセンターでは燃やしませんということで徹底させていただいて，いわゆる市民と事業者の皆様のご協力を頂いています。だから今でも上津クリーンセンターに直接持ち込みいただいたときに，ダンボールの中に燃えるゴミを入れて持ち込まれると，「ダンボール箱だけはすみません，古紙回収の方にまわしてください」ということでお願いしてると思います。

それから剪定枝のリサイクルですね。野焼きの禁止というのが法律で定められまして，たとえば自分のところの庭で切った剪定枝など最近，非常に量が増えております。多い年は年間1200トンくらい持ち込まれますので，そういったものを有効利用しようということで，酪農家のほうと行政の方でタイアップしまして，剪定枝のチップ，おがくずのようなものですね。ちいさくして，それを堆肥を作るための水分調整剤として有効利用していただく。昨年度は約600トンくらい剪定枝を有効活用させていただいてます。その他に機密文書の大型シュレッダーを導入したりとか，様々な取り組みをさせていただいております。

その結果ではございますけれども，成果として2つのことが言えるのではないかと思います。一つは可燃ごみの処理量が平成8年から17年で約8％減りました。それから最終処分量につきましても埋め立て量が7000トンで約4割減少しました。そういった中で中間処理施設，いわゆる清掃工場，焼却工場ですね，平成8年に今の上津クリーンセンターの次の焼却工場を作るという計画があったんですけれども，現実の問題として，それを10年以上先送りできているというのはごみ減量のおおきな効果であると考えています。もう一つは最終処分場，今杉谷にありますけれども，その規模が4割まで縮小できたというのは大きな効果だと思います。

もう一点は，先ほど冒頭福田さんからご紹介がありましたけれども，ごみ減量緊急宣言後のそういった取り組みによりまして平成16年17年二ヵ年連続でゴミの減量ができております。平成17年度で申し上げますと事業系のごみが2400トン，約7.3％減少しました。家庭系についてもほとんど横ばいだったものが平成17年

度につきましては2.2%，1100トン減少しております。ゴミの総量が減ってリサイクル量が増加しました。ですから久留米市として初めてリサイクル率が20パーセントを超え，20.1%になりました。それがこれまでの久留米市の取り組みの成果だと思います。

そういいながらもゴミは常に増える傾向にあります。いっそうのごみ減量の取り組みが私どもでも必要です。その中でも大きなターゲットになるのは生ゴミの問題なのかと思います。家庭から出るゴミの中で重量ベースで約3割占めております。こういったものを次にどういう形で減らしていくかというのは大きな課題だと思いますし，平成17年度からダンボールコンポストといいまして，ここに少し書いておりますけれども，手軽に安価にそして場所を選ばずベランダとかでもできる堆肥化の手法がございますので，そういうものを活用しながら進めたいということで平成17年度はモニター事業を今進めさせていただいております。そのほかに久留米市の北野のほうで放線菌を使った減量の取り組みだとか，あるいはいろんなぼかしをつかった取り組み，これまでやってきたコンポストだとか，電動式のゴミ処理機，いろんな取り組みがございますけれども，いろんな手法を活用しながら進めています。もう一点はごみ減量の問題は人のライフスタイルの見直しに根ざす部分が非常に大きいです。そういう意味で環境教育が非常に大事になってきます。これについても積極的に進めていきます。また，ごみ減量の問題はやはり，久留米市の場合は4Lではなくて，3Rというのを基本に進めさせていただきます。まずはいかにゴミを出さないか。発生抑制。どうしても出てきてしまったものは再使用できるかということを常に考える。どうしても再使用できないということになると材料に戻してリサイクル。いわゆるペットボトルのように原料に戻して再利用しましょうと。3Rを基本に進めていきます。最後にまとめますと，私たち一人ひとりが何ができるかということをしっかり考えていただきたいということで，便利さ，豊かさに慣れたライフスタイルの見直しが重要だ

と考えます。これを皆さんと一緒に取り組んで行きたいと思っておりますのでよろしくお願いします。以上で私の報告を終わります。

駄田井：どうもありがとうございました。積極的に取り組まれていることを説明していただきました。続きまして白仁田さんにダンボールコンポスト関係，家庭のゴミをどう資源にするか，これに関連ある取り組みをお話していただきます。

白仁田：こんにちは。くるめ大地といのちの会の白仁田です。さっそくですが私の資料をごらん下さい。一番最初のくるめ大地といのちの会活動の全体構想というのとグラフのほうですね。グラフの裏がレジュメとなっております。時間が押しておりますので，初めにというところはこちらの図を見ていただいたら一番わかりやすいと思います。三角形が中央にある図のほうですが，これが私どもがやっております活動の基本的な項目です。

家庭や学校や事業所で出ます生ゴミを元気な土に還す。畑に持っていって，まっすぐ機械も何も使わずに生ゴミをそのまま土に還すということを第一段階でしております。その土から元気な野菜，無農薬の無化学肥料の安全で安心で健康的な野菜を作るという活動をその次の段階としてやっております。それをまた家庭や学校や事業所に届けるという活動を第三段階として考えております。ですから家庭，学校，事業所で出る生ゴミをそのまま畑に持っていって土に還し，その土から野菜を作り，その野菜をまた家庭，学校，事業所にもっていくという循環した考え方で取り組みをしています。レジュメに沿っていきますと，もともとこの生ゴミから土作りをし，野菜作りをするというのは，実は生ゴミから無農薬の無化学肥料のおいしい野菜ができるということをご存知の方はどれくらいいらっしゃいますか？ありがとうございます。かなりの方がご存知のようでありますが，まだまだご存知でない方もいらっしゃるかと思います。私も去年の12月でしたか，

西日本新聞社の食卓の向こう側という連載，本屋さんでも出ておりますが，そういうシンポジウムがございまして，そこで初めて知りました。そこで取り組まれているのが佐世保の吉田俊道さんという方ですけれども，この方が生ゴミから元気な土を作り，元気な野菜を作るという活動を佐世保でしております。この活動は本にもなったりいろんなところでシンポジウムが開かれていたり，講演会があったりしております。そういう中で私はもともと商売をやっておりましたので，自分のところで出る生ゴミをなんとかならないかということを思っておりまして。そこで吉田さんの話を聞きまして，これだったら生ゴミが全くゼロになる，今まで嫌われていた生ゴミが資源になるというショックを受けました。これを実際やってみようということで，今年の2月から，今久留米市議会議員の楢原さんという方が北野のほうにいらっしゃいますが，私の話を聞いてそれやったら自分のところに土地があるから使ってやらんかということで，それでやっております。私がやっていることは，店でやっていることは店での分別です。生ゴミと，普通のゴミ。お絞りだとかつまようじだとか箸だとかをわけます。そして生ゴミを漬物にするんですね。粕漬けにするんです。腐らせないんですね。生ゴミというのは腐敗していきます。しかしここのところが日本の古来の食文化のすばらしいところがございまして，粕漬というのがあります。漬物というやり方がありまして，保存食にするんですね。詳しいことは本屋さんで吉田さんの本を買っていただくか，毎月第一土曜日に久留米市民サポートセンターというところで勉強会，定例会しておりますのでそちらの方にお越しいただければ詳しく説明いたします。要するに漬物にして腐敗させないということをしております。1週間から2週間保存できるんですが，その保存した物を軽トラックで畑にもって行きます。畑にもって行きまして，土作りをやっていきます。今は土作りにも，今日もおこし頂いていますけれども，久留米の三牧さんだとか，ボランティアの方，いろいろと吉田さんの公演を聞いて，これは自分もやってみたいなという方が少しずつ仲間がでて

きておりまして，今は北野の畑，小郡，小森野，井手さんは今日はお見えじゃないかな。今少しずつこういうことをやっていこうという人が増えております。そして土作りでできた畑で野菜を作っております。これは吉田さんのところで修業しながら，26歳になるんですけれども，もともとニートだった人がこの活動に共感を受けて，今一緒に野菜を作っております。逆に私たちが指導を頂くような，そういう人もいらっしゃいまして，生ゴミから土を作って野菜を作ってやっていくこの活動は非常に大きな，なんといいますか，生ゴミだけの問題ではなくて，いろんな方々との出会いだとか，いろんな方々の思いが共感できる取り組みだなと思っております。

これから取り組みたいことですけれども，先ほどの図を見ていただくと，家庭，学校，事業所，元気な土，元気な野菜を作るという三つの大きな三本柱なんですけれども，これは実はどれか一つがたくさん出ても，どれか一つが大きな枠になっても進まないんです。例えば家庭や学校や事業所から出る生ゴミが全部くるめ大地といのちの会で取り扱ってくれといわれても今はその土地がありません。土地があってもそこで作業する人がいなかったら元気な野菜作りはできません。私が今年の初めからこの活動をやってきたんですけれども，最初は自分の店から出たものを北野の小さな100坪くらいの畑に戻して少しづつ土作りをしてきました。2ヶ月たち3ヶ月たってまだ野菜はできないのかと持ち主さんから言われたり，私の友人たちや知人がこういう活動をしてるということを知っておりますので，夏には野菜ができるやろって言われましたけれども，なかなかそれができませんでした。やっと秋，冬あたりで畑一面の野菜ができるまでなんとかたどり着いてきた感じです。できなかったのは人がいなかったからです。ゴミも足りませんでした。何を言いたいのかというと，私が今やっている活動が少しずつ少しずつ大きくなっていく。この三角形が最初は小さな三角形でした。最初は私一人。そしてうちの従業員さんたちでやってきました。そしてその次にボランティアの方々が

参加し始めていただいております。そして少しずついろいろな事業者がこの活動に興味をもっていただいて，自分のところも白仁田くんのところに頼もうかとか，自分の畑に連れて行ってくれという仲間がまた少しずつ増えてきております。この三角形が大きくしていくことが私の大きな目標であります。

そのためにはまず学校，幼稚園などの，吉田さんの講演活動の企画をもっと積極的にしていかなければならないなと思います。最終的には消費者の方々及び市民の方々のご理解を頂くことが必要なんですが，そのためにはこどもさん，幼稚園生やら，小学校のお子さん達からこういう食育ということで，生ゴミで健康的なおいしい野菜ができるということ，及び健康的なおいしい野菜ができるということだけではなくて，私たちは実は地球に支えられている，食べ物に支えられている，いろんなものに支えられて私たちの生活はあるんだよという，久留米市の吉田さんもおっしゃいましたが環境教育ということをしっかりしていくことが大切だなと思います。そして家庭だけではなくて事業所，専業農家の方々がこの運動に参加できるためには仕組みづくりが必要だと思います。ボランティアだけでやっていくのも限りがありますので，大きな全体的な仕組みができないかなということでこれを考えております。それから社会的弱者といわれる方々にもこの活動に参加していただく要素がいっぱいあるなと思っております。そういうことを考えながら，ますますこの活動を推進していきたいと考えている次第です。以上です。

駄田井：ありがとうございました。ゴミ問題として携わっていて奥の深い人の生き方というのにも関わっているのではないかということが伺えるようなお話でした。では次は大木町が目指す循環のまちづくりということで境さんよろしくおねがいします。

境：みなさん，こんにちは。久留米市以外で唯一ご招待いただきましてありがとうございます。大木町が目指す循環のまちづくりのことについて10分程度の時間ではおそらく中途半端な話ししかできないだろうと思っております。

実は視察の受け入れを有料でやっております。お茶つきで500円。おみやげも何か考えたいなと思っておりますので，もしよかったら一度，最近施設が出来上がったばっかりなので，隣町のことでもありますので是非来ていただけたらと思います。ちなみにこの施設は町の第三セクターが運営しています。視察料はおいしいお茶つきで500円。食事つきで1600円。1600円は高いのではないかと交渉しております。

先ほどから参考になる話がいろいろありましたけれども，やはり循環社会を目指すということについて少し触れておく必要があるのではないかなと思います。たしか2，3日前に南極のオゾンホールが過去最大になったというニュースが流れてました。その記事を読んでちょっと前に町の看板屋と話していたら，最近看板のペンキが持たなくなったというわけですね。紫外線が強くなったというわけです。昔はペンキが6年くらいもっていたけれども最近は3年しかもたなくなったという話をしていました。現場では環境の変化を敏感に気付く位環境の変化が身近の問題になりつつあるということです。

NHKの朝の番組の中で異常気象の話がありましたけれども，今年は異常気象が多かった年だと言っていました。今年，多かったですね。どんどん増えています。明らかに増えてます。そういう意味では地球温暖化の影響は身近な問題となってきている。原因は皆さんご存知のように大量消費社会の限界ですよね。地球が持続的に供給できる量をはるかに超えて消費しておりますし，人間が出しているゴミというのは地球が処理できる量をはるかに超えて出している。その影響が出ている。この影響がこれからどんどんひどくなっていって，一番深刻な被害者は未来の世代ということははっきりしています。そういう意味では今の私たちの行

き過ぎた生活というのは，未来の世代を食い潰してると言えるのではないかなと。そういう意味ではとにかく私たちの責任として行き過ぎた状態を，持続可能な状態に引き戻すということが緊急課題だと思います。それがいわゆる循環型社会と言われるものであると思います。しかし，私は循環型社会と循環社会ときっちり区別する必要があると思います。ここでは詳しくは言いませんけれども。循環社会を作る上において，日本において国と地方の役割分担というのが非常に大事だと思います。国は非常に大事な役割を担っています。法律とか制度とかをきっちり整えておいてもらわなければならない。例えばEPR（拡大生産責任）の問題とか，ディポジット制，炭素税の問題などがあります。そういう持続可能な社会を作っていくうえで必要な法制度を作ってもらわなければならない。そうしないと前に進まないという状況があります。しかし今の国の法律は，依然として経済優先です。10年経って見直された容器包装リサイクル法がありますが，これはほんとに使い捨て容器推進法みたいな感じがします。ペットボトルは法律ができる前に比べて生産量が3倍くらい増えています。リサイクル量は100倍に増えている。しかしゴミの量は結局2倍に増えています。そのリサイクル費用のうち自治体や住民が負担しているのが80％です。事業者はたった20％しか負担していないといわれています。いろいろ計算の仕方はあると思いますけれども。その見直しの時期を迎えたのですけれども，性格は変っていません。レジ袋でお茶を濁す程度で終わってるのは，私たちから言わせると腹立たしい状態です。しかし，いずれにしろ循環社会を作って行くうえで地域の役割というのは大きい。循環社会を作っていく主役は地域だと私は思っております。地域の住民とか行政とかNPOとかそういう人たちが協力して協働してその地域にあわせた循環社会を次世代のために早く作る必要がある。

大木町は循環社会を目指そうといくつかの目標をかかげています。これはとにかく今ゴミになっているものとか放置されてる物を地域資源として活かしていこ

うということ。もちろん生ゴミ・屎尿の活用とか，掘割にある水草とかそういうものを全て地域資源として地域で活用していく仕組みを作る。そのために住民とか行政とか事業所の責任をしっかり果たしていく。そういう役割分担をできるような仕組みをつくろう。それから食べ物とかエネルギーをなるべく地域で自給していこう。それともうひとつ大事なことは，行き過ぎた社会の価値観を変える必要がある。そのためには40年前の価値観をもう一回見直す必要があるのではないか。大木町で40年前50年前の暮らしの様子を絵本にし，全世帯に配ったことがあります。昔の人たちがずっとその地域で伝えてきた暮らしの知恵をもう一回見直す必要がある。行き過ぎじゃない価値観をもう一回見直す必要がある。

そういう循環事業の中心事業として有機資源循環事業が動きだしたところです。生ゴミとし尿と浄化槽汚泥を地域資源として地域に循環利用していこう事業を立ち上げたのですけれども，例えば生ゴミをひとつ地域で循環利用する場合に，たとえば堆肥化施設を作るとできるとかそういうことではないと思います。ハードの問題ではないと思います。基本的にはそれを支える地域システムが非常に重要です。例えば生ゴミを分別できなければ，全住民が分別できなければ使えない。それをきちんと資源として変換させて，変換させた肥料とかを地域できちんと使えなければ，何の意味も無いんですね。さらにそこでできた農産物を学校給食とか地域の家庭の食卓に届ける仕組みを作る。そういうような地域で完結した輪を作るということが非常に大事です。そういう社会システムが非常に大事。社会システムについては3年間大学とかで共同研究してそれを作り上げてきました。その実績のうえに事業を立ち上げました。

生ゴミ分別については山形県の長井市のレインボープランでやっているバケツコンテナ方式を採用しています。これも共同研究事業の中でモデル事業としてとりくみました。

今全世帯に生ゴミ分別をお願いするということで，事業の説明から生ゴミの分

別の説明会まで1年弱で各集落を2回ずつ全部で約100回の説明会を開催しました。生ゴミ分別説明会というのは，住民の皆さんの感心が高くて驚異的な参加率でした。地区の集まりの参加者の最高を更新しています。ある地域は弱い台風が来た夜やったんです。後から聞いたら説明会をやっている時は台風がちょうど上にあったんです。その時に公民館の入り口に入りきらない人たちがかけつけて分別の説明会に参加してくれました。どこの地域でもそういう状況ですね。少なくとも説明会の時は，生ごみ分別に対する反対意見はでません。もちろん地域の中で，生ごみ分別はくさいね，イヤねとかいう話は当然ありますけれども，全体としては協力的に今やってもらっています。それを裏付けるデータがあります。これはモデル事業のときのアンケートの結果です。500世帯くらい生ゴミ分別をやってもらって事後に無記名でアンケートを実施しました。その時ですね生ゴミ分別についてよいことだと思った人83%，どちらかといえばよいことだと思う人15%。98%の人が賛成しているんです。驚異的な数字です。ほんとに住民は自治体が，行政がビジョンを示して参加を呼びかけることに対しては協力してくれているという状況にあるんだろうと思います。

これは今の生ゴミ投入状況です。専門的な話はやめます。

この施設は町のど真ん中に作っています。国道のバイパス沿いに作られています。今一期工事が終了して，メタン発酵施設と自然環境とか循環社会に関する学習施設。これらの施設は11月から本稼動します。二期工事として郷土料理レストランとか農産物直売所とかを作っていく計画です。この施設については食と農と環境を結ぶ中核施設としていこうと。基本的に環境だけのことを考えるということは今はできないんですね。特に大木町のような農村においては環境問題と農業の問題と食の問題は切り離せないと思います。合わせて町づくりの問題で切り離せないんですね。そういうものを合わせてやっていく必要がある。そうしないとうまくいかない。町のど真ん中，迷惑施設ですよね。通常はできるだけ端のほう

とか隣町，大木町の場合久留米市さんにということになるんですけれども，そういうことじゃなくて町のど真ん中に，もともと生活と切り離せない生ゴミや浄化槽汚泥を住民みんなが見えるところで処理，再生していこうという考え方で作っています。合わせて，地産地消，地域の農産物を安全な物を地域の人が消費する仕組みとか，昔から伝わるスローフードを地域でもう一回見直すそういうことが非常に大事な時期になってきている。その拠点にしていこうというのが今回の施設の構想です。

これは今出来ているところですね。メタン発酵槽とガスホルダーがあります。周りが学習施設ですね。

この事業をやることで，今までのゴミ処理費用よりも循環利用することでゴミ処理費用が町としても大幅に削減をされます。運営自体は第三セクターが指定管理者制度に基づいて運営をやっています。将来的にはこの事業は住民が関わるのが一番いい，住民主体のコミニティビジネスとして立ち上げたいと思って準備しております。名前が「くるるん」。是非500円かかりますけれども来てください。どうもありがとうございました。

駄田井：どうもありがとうございます。非常に簡潔な話でした。本物の循環型社会の説明でした。最後に河内さんお願いします。

河内：皆さんお疲れで私の話を聞く余裕が無いのではないかと思います。ちょっと話を聞く前に皆様手を上げてください。体操してから話をききましょう。もう話を聞くのは飽きてしまった感じかもしれません。

日本の話よりも他所の方がおもしろいかもしれないということで私が視察に行ったときにかってきたペットボトル。これは詰め替えて使えるペットボトルです。配布資料に書いていますけれどもペットボトルを返すとお金がもらえるというも

のです。こちらはビールのペットボトルです。こっちはいわゆるコーラです。いずれも容器を返すと30円とか40円とかお金がもらえる。だから絶対返す。個人的に返さなくても，どっかに捨てていたらもうかったという感じの世界で100％に近い回収率があるということです。先ほどお話があったように容器を自治体が80％負担して処理するということにならない。お金をとっているからそのお金を処理費用に回す。しかもすぐリサイクルするのではなくて20回くらいは詰めかえて使える。最終的にリサイクルにするというスタイルです。このようにゴミをそもそも出さないシステムを欧米の先進国では作っています。だからゴミを削減できるということです。これはペットボトルだけに限らない。ここに布袋を持ってきましたが，買い物袋です。通常だれでもマイバックを持ってきます。このような買い物袋がほしい人は，100円から150円くらいでスーパーとかいろんなところで売っています。これは繰り返して使えます。あるいは私がいつもやっているのは，普通のもらった買い物袋をバックの中に入れておいて，自分が使った袋だったら何度使っても，少しヨゴレた袋を使ってもいいという風なことを含めて実践していこうということもあります。それを促すスタイルとして，袋を持ってこなかった人は10円なり20円なりビニール袋代をとられ，有料になっています。日本でもようやくレジ袋の有料化を始めようとしています。日本ではゴミ焼却が中心になっておりますけれども，これは日本だけではなくてイギリスもゴミ焼却をかなりやってました。しかしこれはなぜこうしているかというと　安上がりで安全にゴミを，削減できるということでやっているわけです。ところが最近「実際には必ずしも安上がりでも安全でもない」ということが海外での疫学的な調査でははっきりしてきました。焼却施設周辺の人たちは，わけのわからない病気にかかるヒトが多いという調査結果です。その医療費は誰が出すのかということです。結局はゴミ処理費とは別だけれども医療費としてお金がかかるわけです。そういう意味ではゴミ処理のトータルコストとして安くは無い。つまりは安全な処理ではないと言

うことです。このことはゼロウェイストの最初のお話では，まさにそのことを言ってるわけです。ゴミを減らすことは経済的にも有利なんです。最初の話で将来的になにか病気になってしまって，その治療費は自治体が負担することになるんです。あるいは個人が負担することになります。ゴミ処理費を，駄田井先生が話されたようにゴミ処理費にお金をかけるよりもゴミがでないようにすることに金をかけたほうがいいのではないかということです。ですから例えば久留米市ではゴミ処理用のすてる袋を有料にしています。有料袋で上がった収益はドイツやデンマークの場合には，ゴミ処理をいかに効率的に，あるいはゴミを減らすために工夫するためにその費用を使うというように使っています。そういう風にすればゴミを減らすことにも繋がっていくということになります。

具体的に減らす方法のひとつは生ゴミを削減するという方法があります。これはなぜかというと生ゴミは，久留米市のほうから話がありましたように，集めたゴミの約30％占めます。それを減らせば処理費がぐっと減るわけで，焼却しないということです。生ゴミは大木町さんがやってるようなやり方がひとつあります。それは自治体が中心になって集めるやり方。あるいはダンボールコンポストやEM菌を使った家庭での処理です。あるいはコンポスタという生ゴミを庭に入れて堆肥化する容器です。直接庭に埋めてもいいわけです。要するに生ゴミを焼却ゴミに回さないようにしようということで，そうすることで焼却ゴミを減らすことができます。そういう風に欧米では削減できることを地道にやっているのです。だから特別な変わったこと，初めて聞くようなことをやってるわけではないのです。でもみんなが知ってるけどやっていないことを，欧米ではことこまかにずっとやっているわけです。先ほどのペットボトルの例も含めてゴミにならないように「いかに商品化，製品化するのか」ということを具体的に地道にやるのです。それがゼロウェイスト，ゴミゼロに向けたステップなのです。

もう一つは直接生ゴミを堆肥化する方法がありますが，もうひとつは生ゴミを

メタン発酵させてバイオガス化するというやりかたです。これは大木町さんが始めたようなやり方です。これを日本の場合にはなかなかやろうとしないのです。生ゴミをそもそも別にして集めようというところは限られています。それから「堆肥の使い道がない」大都市になったらますます用途ないではないか堆肥をどうするのか，ということがすぐ出てきます。このバイオガス化というのは大木町さんでは，それをガスにしてエネルギーにするのと，液肥料，肥料にするという両面で使うことができます。これはドイツやデンマーク，オランダでやってるんです。先進国できちんとやれるということです。バイオガス化に関してはいろんなやり方があります。日本でもようやくバイオガスプラントができているという状況です。やる気になったらできる。

おもしろい話をひとつご紹介しますと，プリントを配る時間が無かったので，別に持ってきておりますけれども，これはバイオガス施設を新たに作らないでガスを利用している方法です。日本の私のたまたま郷里なんですが，新潟県の長岡という人口約20万の街があります。下水処理場で，下水処理をやると必ずバイオガスが発生します，久留米市の処理場でも発生しています。通常このガスはその施設で汚泥を乾かすために使うとかあるいはフロの湯を沸かすというレベルでしか使っていなくて，ガスが余っています。余ったガスはどうするのかというと，邪魔として，ただ火をつけて燃やしちゃうという無駄使いをやっています。これは一般的などこの自治体でもやっていることですが，長岡市がおもしろいのは，このガスをもう少し精製してガス会社に売っているのです。例えば西部ガスみたいなガス会社にメタンガスを売る。自分のところで発電機をつけて発電すると発電施設はお金がかかります。しかし直接ガスを売ってしまう。ガス会社が買ってくれてまぜて都市ガスにして売ってくれる。何の施設もいりません。安上がりにできる。という方法です。これは例えば久留米市の場合は生ゴミのバイオガス装置を新たに作ってもいいんだけれども，作らなくても，今久留米市には下水処理

施設の大きいのがありますが，それは下水道処理が全市に広がっていくことを前提として大きく作っています。余力がかなりあるんですね。その余力のところに集めた生ゴミを持っていって，粉砕して，混ぜるという工夫をすると，新しい施設を作らなくてもガスを発生させることができる。そのガスをガス会社に売るなり，久留米市では市ガスというのがあって，そこにされても良い。そういう風なことを，欧米の場合ではバイオガスで発電する。バイオガス施設があります。

これはゴミなんですけれども，いわゆる一般的にはゴミなんですけれども，こんなボックスを囲ってまして，それと同じように，これはプラスチックをこの中につめています。圧縮して。今プラスチックは一般的には日本では燃やされています。プラスチックは皆さんご存知のように石油で作られている物だから，石油が高騰した場合には，ただ燃やしてしまうのはもったいないものなんです。プラスチックから再生ができるということですけれども，日本の場合にはコストがかかりすぎて燃やしたほうが安いということで燃やしています。デンマークの例なんですけれども，デンマークはこういう風にして固めておいて，雨が降ってもかまわないわけです，プラスチックだから雨に濡れても問題ない。ただし飛び散ったりいろいろすると悪いのでプラスチック，ビニールでつつんで，空き地において保存するというやり方をやっています。これは将来コストが似合う段階。先ほどのお話から40年経ったら石油はなくなる。なくなるということは高くなる。今みたいに自由には使えなくなるということがあると思うんですね。その段階で値上がりした段階で，第二の石油のような意味で新たに使うことを考えることができるというような，保管しておく方法です。だからゴミは邪魔者で早く燃やしてどこかにやってしまおうという発想はしない。コストがかかってダメだというときは保管する方法も考えとくという風なこともやっているわけです。

詰め替え再使用というのはゴミを減らす方法で，先ほどお話したように詰め替えて使う方法。これは洗えばすむことということでエネルギーが少なくて済むわ

けです。詰め替えて使うことにたいして，日本はかつては世界で優等生で，世界が見習ったことなんですけれども，今は詰め替えてる様子というのは，ビール瓶やお酒のビンは少し残っているけれども，それよりもパック商品化したものがどんどん売れていて，詰め替え利用が減ってしまっているという状況があります。そういう風なやり方をドイツでも導入したが，だんだん詰め替えて使うビンが減ろうとしている。ところが彼らはどうせやらない人が出てくるだろうと。72%詰め替え利用しなくなったら罰則をつける，有料にしてしまう。デポジット製に完全にしてしまうという，歯止めを最初から予測して作っています。一定より下がらないようにするということをしています。

久留米市の例で紙が問題だと。それを作る方法は通常集めている紙だけではなく，いわゆる雑ゴミです。通常のちっちゃくなっているゴミとか，新聞紙，雑誌，ダンボールは集めているがそれ以外のものは回収しない。もっと集めれば燃やさなくて済むものもたくさんあります。もうちょっと工夫すると再利用して古紙を作れる。用途としてどうなのかというと，農業用のマルチ，これは要するに草が生えてこないようにするために，今はビニールをしいているわけです。その代わりに紙を使う。そういう用途。あるいはコンクリートの型枠を今木で作っているが，そういう風なものを紙で作る。あるいは壁を古紙を使ったボードにして壁にできるか，というな感じで用途を広げていくと，従来どおり古紙を回収しても十分回していく。

生ゴミが集まって堆肥がたくさんできたら使うことが無いではないか。都市でもだいたい公園緑地というのはたくさんあります。そういうところに優先して持ち込む。そうやって消費することは可能です。それから先ほど触れました下水処理場ですね。ガスを発生させる。それから発電させるためだけではなくて，熱も利用すると効率が3倍アップします。熱効率は，結局発電すると必ずお湯が沸きます。沸いたお湯の使い道がほとんどない。例えば久留米市の場合には温水プー

ルを使ってます。でもそれだけでは余ります。余ったやつをもっとお湯を使うという形。お湯は暖房にしか使えないと思っているかもしれませんが冷房にも使えます。ヒートポンプというようなものを使えば冷房にも使える。というようなことでもっと効率をよくすることを日本でも取り入れて行く必要がある。ここに書きますと日本でも都市ガスに混ぜて利用する例として，発電機にしなくてもガスとして売ることができます。

これはドイツの地で，集めた堆肥を作るシステムですけれども，いろんな堆肥システムがある。生ゴミは焼却してはいけないという法律があります。だから堆肥にするかガスにするか工夫してどうにかするしかない。1時間切っているということなのであとのご紹介は後で。もう一つだけ。これは大木町と同じで焼却場の代わりにバイオガスを作る施設を作るという例があちこちにあるということです。どうもありがとうございました。

駄田井：ありがとうございました。予定ではここでもう少しやり取りする予定だったんですが，時間もおしておりますのでここで休憩をとりたいと思います。10分間。3時15分までです。よろしくお願いします。

— 休　憩 —

駄田井：何かご質問がございましたらお願いします。質問される場合はどなたかに特定される場合はこの方にというのをお願いします。できれば簡単にお名前と，どこに住んでおられるかくらいはお話ください。何かございませんか。

A：高良内のアイサイと申します。久留米市の吉田さんにできたら答えていただきたいと思いますけれども。どうもパネリストの皆さん，ありがとうございます。いいお話をたくさん伺うことができました。

ゴミは燃やさなくても処理はできるのではないかというお話だったと思います

けれども，燃やせばお金がかかる，環境も汚染される。私たちはこれから燃やさない方向でいかなければならないと思ったわけですけれども，9月15日の広報久留米でしたでしょうか，久留米市のゴミ処理基本計画の欠点，見直しでしょうか，書類が各家庭に配布されていました。その中で21年度までに杉谷埋立地の第二処分場を建設するということと，23年度までに地域の北部に中間処理施設を作る予定であると書いてありました。今日のお話を聞くとどうも今から先世界的な流れとして，それはどうも矛盾じゃないかなとちょっと気がしました。今から久留米市としては，将来を見据えた展望，ゴミは燃やさない方向でというような計画はあるのかという，見通しのお話を聞きたいというのがひとつです。

もう一つは，生ゴミに関してダンボールコンポストとかに取り組んでおられますけれども，これは，家庭の個人のやり方，個人の努力に関わっているということが大きいと思うんですけれども，これは大木町のように主として組織的に取り組むつもりはないのか，ということをお聞きしたいと思います。

吉田：一つ，中間処理施設とか埋立地，そういったものはゴミゼロを目指すのには必要ないのではないかという話しでしたけれども，確かに大きな方向性として，循環型の社会を目指していくうえで，ゴミは極力減らしていきたいと，基本的にはそう思っております。ただ，先ほどお話しましたように，久留米市でゴミの排出量は旧久留米ですけれども約10万トン。そのうち20％はリサイクルできている。8割は現実のゴミとして処理すべきものが残っているのも事実です。今ここでいろんな議論が出ているように，生ゴミをすべて有機物として有効利用するというのができれば確かにゴミはもっと減ると思っていますけれども，現実の処理として，8割を適切に処理する必要がある，という話になりますと，今の久留米市の施設の整備状況で処理できるかというとできないと思っております。そういう意味からすると杉谷の第2処分場の問題であるとか，北部の焼却の問題は計画的に

進めざるをえないと思います。

もう一点，生ゴミについて，大規模な設備ができないかと。確かに全国の資料を見ますと，東北の長井市でありますとか，先ほどご報告いただきました大木町さんのほうでは生ゴミのリサイクルを町を上げて取り組まれているということで，非常にいい事例があると思います。ところが久留米市でそれがすぐできるかというと現実は難しい。なぜかと申しますと，生ゴミのリサイクルを考える時にハードルがある。一つは市民の一人ひとり，それぞれの家庭の中できちっとした分別ができるのか，というハードル。二つ目は，集めた生ゴミをきちんと有機質の飼料として作れるのかという技術的な問題。三点目は，それをどのようにして有機質肥料として役立てることができるのかということ。もう一つはコストの問題です。やはり市民のみなさんから預かっている税金は有効活用したいということを考えると，コストは除外はできない。一番難しいと思っているのは，最終的には利用先の問題です。今度新しく合併いたしました三潴町さんのほうですが，三潴町でも生ゴミを堆肥化する取り組みをされていたと聞いております。しかし実際に生ゴミを集めてみると中にフォークが入っていたり，ビニールが入っていたり，いろんなものが混ざっている。農家のほうで使っていただこうと思ったら，そんなゴミでは使えないということがあったということです。結局その辺についてはうまくいかなかったと私どもはうかがっています。最終的にできた堆肥が農業者の方にきちんと利用できるような仕組みができればいいと思いますが，まだまだそこまでの意識の問題とかがレベルアップできておりませんので，みんなでしようという住民意識，そういうものが大きな課題ということで，現時点では久留米では大規模施設を造って生ゴミを堆肥化するというところまでには至っていません。この点につきましては，平成10年ちょっとすぎくらいだと思いますけれども，久留米市の中でゴミ問題協議会という，いろいろな専門家の方に入っていただいて，検討する会議があったわけですけれども，その中でも今のような話がされて，

現時点では家庭，地域で出た生ゴミの堆肥化に取り組まれる分を行政としても支援していきたいということで，そういう取り組みは進めたほうがいいのではないかという意見でした。そういう流れの中で　従来からやっている生ゴミのコンポスト，電動式の生ゴミ処理機，そういったものをそれぞれの家庭で購入される時に，市のほうから助成させていただいたり，さらに，そういったことを広げていくには，いろんな手法を研究する必要があるだろうということで，今年度ダンボールコンポストのモニタリングをさせていただいていますし，新しく合併した北野のほうではホウセン菌を使った生ゴミの堆肥化が取り組まれていますし，城島町のほうには，EMぼかしをつかった生ごみ堆肥化に取り組まれているところもございますし，久留米市内にもいろいろなところにEMぼかしを使って生ゴミを堆肥化させて野菜を作っているという取り組みもございます。そういう取り組みが少しでも広がればなと思います。その他にでも，行政のほうに，生ゴミの堆肥化の良い方法があるということで，聞いたことがあるかもしれませんが，酵素を使った消滅型の生ゴミ処理なんですけれども。いろんな手法を私たちは勉強させてもらっています。ですから市民の皆様にいろんな生ゴミの堆肥化の手法を情報提供をしながら少しでも有効活用できるような取り組みに繋がればいいなという風に思っています。

駄田井：生ゴミを処理するとき4つの分別をやろうという，技術の問題，利用先だとかコストの問題だとか課題だと思いますけれども。実際大木町さんがやられています。そこのところはどうですか。課題が残っている場合にはどういう風な解決がありますか。

境：生ゴミだけに限らず，次の世代に胸のはれる社会を作って行こうというのが原点にあると思っています。今回の生ゴミの分別について，たいへん住民も窮屈

だと思います。ただ，これは今まで行政，住民が一緒になって検討してきて，これでやろうというふうに決めて，やっていこうということです。この取り組みの一番大きな大事なことは，住民と行政という地域の生活者が同じ土俵できちんと協力し合えるかということが決定的に重要です。久留米市さんも大木町と同じことをやるのがベストなものか全くわかりませんし，地域によって全くあり方が違うと思います。それぞれの地域でどうするのがベストかというのは，地域にしか分からない。国も県も全く力を貸してくれないというのははっきりしていますから，生活者がいかに知恵をだしてそういう社会を作っていくのか。本当にそれぞれの地域の独自性をそういうところに出していくということが，これからの地域づくりに決定的に大事なことと思います。

河内：紹介が適切かどうか分かりませんけれども，ひとつの考え方として，ゴミ処理と二酸化炭素の削減など，環境のこともセットにして考えられなければならないということです。先ほどの大木町の話だと生ゴミで農産物も安全に作れるというシステムの紹介がありました。大木町はそのシステムを町全体で取り組んでいるということです。大木町さんが言われたように県や国が補助してくれないというのは現実的なことです。これは駄田井先生のお得意な分野なんですけれども，何か新しいやり方をすると，儲かる，損はしないという方法を工夫してもらう。先ほど駄田井先生がゴミが出ないようにする研究等にお金を使うのが良いと言われていましたけれども，国内外の事例としてはいろいろなやり方があります。その中からいかに自分の住んでいる町に合わせたやり方ができるかということです。ソフトの部分を工夫するという時代に入っていると思います。その部分を欧米ではゴミ処理で得られたお金を使って（例えば有料袋代金の収入など）各自治体に合わせたシステムを実際作っています。例えば生ゴミも全てをコンポスト堆肥にするといったら，状態の悪い生ゴミからはいい堆肥ができません。そのような生

ゴミの場合にはガスを抜く形で使うし，いい状態で集められるものは堆肥にする。こういう二本立てでやっています。このように考えないでいきなり全部堆肥にしようっていっても，用途もないし，堆肥に使えない場合もあります。だからそういう風なことを使い分けないといけない。「いい堆肥なら使いますか」というようなことを問うてみることも必要です。白仁田さんのとこのように堆肥が足りない，生ゴミが足りないというところもあるわけですね。いい状態の生ゴミなら私のところでも引き取って，元気野菜が作りたいということを仲介しシステム化する工夫が必要です。だから久留米市としてもいきなり全て自分のところでやろうと思っても無理だから，まず仲介をすることからスタートする。いい生ゴミを集める方法を工夫してもらう。生ゴミはすぐ臭くなって嫌な状態になるが，これはボカシなどの微生物を入れておくと，一週間に一回の収集で十分だということになります。このようにうまく回す部分を作っていただくとありがたいということです。いきなり久留米市に全部やれといわれても当然無理です。市長が先頭に立ってやるといったらできるかもしれませんが，ここにこられた環境課の方たちだけでできるわけがないのです。せめて仲介くらいやりましょう。ヤル気があるところはこういうやり方で集めて，必要なところに回していこうということを取り入れていただく出発点とする。多様なやり方で，これしかやり方がないんだということはありません。だから個人でやるコンポストのやり方も，EMぼかしを使うやり方でも，ホウセン菌でも，ダンボールコンポストでも，庭に穴を掘ってもかまわないというように，いろんなやり方を取り入れながら生ゴミは燃やすところからはずしていこう，という流れを作ってもいいのではないかということを皆さんとともに考えて実行していきたいという風に思うわけです。

B：私は少しばかり農業をやっておりますホンダですけれども，吉田先生にひとつお願いいたします。生ゴミを堆肥化するということは，それは容易ではないと

いうことは重々分かっております。でも堆肥を使った作物というのはどれだけエネルギーがあっておいしいものか。これは作ったものじゃないとわからないということです。作物というのは。これで私も生ゴミを焼却するということは，皆さん言っておられるように，温暖化につながったり，いろいろしますから。堆肥化すれば久留米市も焼却ゴミの30％もある生ゴミが10％でも５％でも減らせればいいではないですか。久留米市全体でできないのであれば，河内先生の言われたように，少しでも農村部だけでもやっていただく。環境シンポジウムとか，啓蒙活動をいろんなところでやっていただいて，久留米市の隅から隅までやっていただくとまだまだ盛り上がりがでてくると思いますが，どうでしょうか。

吉田：生ゴミの問題ですね，非常に難しい問題だと思いますけれども，実は私も家が農家なんですけれども。私の家は今はもうやっておりませんけれども，昔，キュウリを作っておりました。やっぱり農業をしていく上で有機物の投入は非常に重要な要素だと思います。土づくりをしないと良い野菜はできない。その通りだと思います。その有機物を投入するためにいろんな資源を活用するというのは一つの方法だと思います。通常は有機物の投入というのは稲藁とか，牛糞とかそういうものから作った堆肥が主流だと思いますけれども，生ゴミでもそういうひとつの材料になると思います。久留米市内でもぼかしを使って堆肥を作って非常においしい野菜を作られる。そういうものについては，少しずつかもしれませんけど私どももそういうものが広がるようにお手伝いをしたいと思っております。ただ，いろんな家庭でそれぞれ事情が違うし，それぞれのものの考え方の違いがあるものですから，今日もそこの入り口のところで話していたんですけれども，ゴミ箱に紙が捨てられているですね。私ども，一生懸命市民の皆様に紙はリサイクルしましょうというお願いをしているんですけれども，現実の問題としてもゴミ箱に紙が入ってしまう。私も環境部の職員として，たばこのパッケージの外側

もリサイクルするようになりましたけれども，やっぱりなかなか意識を変えるきっかけをどう提供していったらいいかというのは，私どもの悩みでもございます。私ども，人の意識を変えていただくためにいろんな環境教室であるとか，環境学習会とか啓発面の取り組みもさせていただいていますけれども，全ての市民にこのような話を聞いていただくというチャンスがあるかというと，現実はなかなかそうはならない。例えば，シンポジウムしても，関心のある方はよく出てきていただくんですけれども，日頃関心がない方はまず出てこられないんです。その人たちをどうそういう場に来ていただくか，そこからスタートしなければならないというのが現実です。今おっしゃった内容については，十分分かっていますので努力はしていきますが，一足飛びには出来ない現実の部分もあります。大変申し訳ございませんがご理解いただければと思います。

C：六門の宮本と申します。久留米の吉田さんと，大木町の境さん，服装と喋りで非常に対照的だなと思いました。それと同時に住民との距離，地域に対する考えかたというものが，その辺に如実に現れてるかなと思います。いつも思うのは，吉田さんは非常に気持ちはおありになるんだろうと思いますけれども，基本的に行政は公平性をまず言われますよね。大木町の規模ならできるかもしれないけれども，久留米の規模は難しいというようなイメージを私受けたんですけれども，もう少し地域に分割して，例えば城島でやってみる，田主丸でやってみる。あるいは旧久留米市でやってみるなど，分割してやってできないものかなと。全部やるのは厳しいかもしれませんけれども部分的にやっていくような，ある程度不公平はでるかもしれませんけれども，少なくとも前向きに進めるという点では現実的ではなかろうかと思います。これはどちらにお答えいただいてもいいので，たぶん大木町の境さんはそういったことで住民との距離をどんどん縮めていかれたのではないかと思います。久留米の場合は，全体に網をかぶせようとするのでい

つまでも距離は縮まらないかなという気がしますけれども，どうでしょうか。

吉田：はっきり言って，返す言葉がございません。おっしゃるとおりだと思います。私どももいろんな地域と密着した取り組みを進める必要性はあるとおもいます。ただ，合併して一段とエリアが広がった中で，久留米市全体としてのゴミ行政をどういう方向にもっていくのかを，きちんと整理をする必要があると思います。生ゴミの処理に関しては実際にやろうとするなら，まずは狭い範囲で，その地域の皆さんのご協力を得ながらでないと，一度に久留米市全体で生ゴミを堆肥化しましょうとしても，現実的には無理だろうと考えています。そういう意味からすると，今宮本さんがおっしゃったような方法ならば可能性はあると思います。それでもハードルは高いと思います。その地域の一人ひとりのものの考え方が違うと思います。それを一つの方向に向けるためには，私どものアプローチも当然必要だと思いますけれども，その地域の方の盛り上がりというか，そういったものが一体とならないと，こういう事業についてはうまくいかないと思います。そういう意味では大木町さんの場合はその両面がうまくいった事例ではないかなと思います。私どもがひとつ聞いているのは，長井市というところの生ゴミリサイクルの取り組みです。そこで私どもが聞いておりますのは，有機農業から入り町をあげて有機農業を展開しようと取り組みを進めてあります。その中で生ゴミも有効な資源ではないか，ということでその活用に取り組んであります。ゴミ減量からではないんですね，入り口が。ごみ減量だけからいくとどうしても限界が見えてくる。もう少し高い次元から取り組みに結び付けなければならないと思います。

境：ぼくが行政の仕事をしていくうえで，反省しないといけないなと思う点は，行政施策を展開する上でどこに合わせた施策にしていくのかというのが重要では

ないかなと思います。例えば，ゴミをきちんと分別してごみ減量に努力している人と，ほとんどそういうのを努力しないで出し放題の人がいる。今までの行政のやり方では，一番低いところに合わせてやっているのではないかなと。ゴミをきちんと出さない人がいるから，取り組みができないという発想で今まできたのではないかなと思います。やっぱりこれから，行政としては一生懸命ゴミを分別して，資源化をして頑張ってる人，そこに合わせた施策をやっていくべきだ。おそらく，例えば生ゴミを堆肥化しようとしたとき，2人が反対，2人が賛成の場合，行政がどういう施策をとるかによってあとの6人がどっちにつくかということが決まってくるわけです。絶対100％賛成というのはありませんから。僕はできるだけそういう先進的な人たちにできるだけ合わせるような施策をとりたいということを心掛けています。それと今回の事業を立ち上げるにいたっていろいろ経過がありますけれども，一番大きな支援というのは，そういうゴミ問題，環境のことに熱心な方たちの支援，後押し。それが一番大きな力になっていると思います。今さっき，生ゴミを使いたいという市民の声が久留米市にある。非常に行政の者として吉田さんもありがたいと思っておられると思うので，そういう人たちの力をどう行政が引き出していくのか，どう施策に反映していくのかというのが非常に重要なことかなと思います。

駄田井：もう時間も10分しかないので，私もコーディネーターとして，一言感想というか私が感じたことを言わせて頂いて，あと少しずつお話をいただいて終わりたいと思います。今までお話いただいた中で，いろいろ有益なことがあったと思います。例えば生ゴミの問題で吉田さんが成功しているところでは有機肥料の技術からはいったのだ。それはとても重要で，もしこういうのがあったらこれを生かそうという発想ではなかなか事業は成功しないんです。そういう要求があるからそれをやろうと。導入思考それが大事。それからもうちょっと議論をやりた

かったんですけれども，時間なかったんですが，久留米市もゴミが減ったのは有料化からです。だから，この有料化というのが有効な手段なのか。どこまでもっていくかというのが問題ですけれども。この有料化の問題，もうちょっと議論をする必要があるのではないでしょうか。反対する人もいると思いますけれども，こういうことから，意識のあまり無い人たちに，お金のかかっていることだよと。そういうことから引っ張り出すということが効果があると思います。思い切った有料化論争はおもしろいと思います。それから，最後に境さんが，あまり低い次元に合わせずに高い次元に合わせろと。有効なことだと思います。高い次元に合わせると，低い次元の人がなかなかついてこないところを，先ほどの有料化でもそうでしたけど，私が紹介しましたようなITのテクノロジーを使ってそういう人たちをのせていく。大変なことだけど，こういう技術使えばできるんだという，手間をかけずにできるんだという，テクノロジーの問題で追い上げていくということが大事ではなかろうかと思います。そういうことをやればもっとスムーズに出来るのではないだろうか。という話でした。最後に一言ずつ感想をお願いしたいと思います。2分くらい時間がありますので。

石橋：今日は皆さんの意見を聞いて非常に私自身勉強になりました。これからも久留米市の行政に働きかけていかなければならないなと，痛感したところでございます。先ほど申し上げましたことで，時間がなかったので言わなかったんですけども，「ゼロ・ウェイスト」の中には拡大生産者責任というのを盛り込んでおります。初めから再生出来ないような物質で製品を作るなということです。それは皆さんも今から先，あらゆる機会にメーカーなりにお話していただければ少しでも広がるのではないかなと，思っています。

それから，先ほど堆肥化ということで，使う所がないというふうなお話でございました。たくさんあるのです，知恵を絞れば。そこの地域の農家でなくてもい

いのです。山の中に配ったっていいじゃないですか。山の緑をきれいにすれば，二酸化炭素，炭酸ガスを固定化することができます。酸素をだしてくれます。そして私たちにきれいな水をくれます。このような考え方で，前に進まないと，物事は進まない。私は，さっき同感だといったのは田主丸町なら田主丸町でいいのです。宮本さんが言われたように小地域で。小地域の皆さんと行政が話し合った中で何を作っていくか，どういう方法があるかということを議論することから始めるのが一番いいのではないかと思います。私はつくづく境さんのお話に，感心させられたことでございます。以上でございます。

吉田：今日はこのような場を与えていただいてどうも本当にありがとうございました。私どもこれからもごみ減量についてはしっかり取り組んでまいりたいと考えておりますけれども，ごみ減量，リサイクルというのは先ほど申し上げましたように，ライフスタイルの見直し。極端な言い方をすると，40年前の生活を。境さんのほうからもありましたけれども，思い出してくださいということです。その中から，できることを一つでも二つでもやっていきましょうという地道な見直しでもあるのかなと思います。さっき境さんのほうからも言っていただきましたけれども，熱心にごみ減量をやりながら有機野菜を作っていこうとされている方，他にもいろんな取り組みをされている方がいらっしゃいます。そういった方のいろんな情報を頂きながら少しずつ久留米市のごみ行政がうまくいくように努力していきたいと思いますので，今後ともご協力をよろしくお願いします。ありがとうございました。

白仁田：私は今年畑を借りて，やっていました土地が，もともとの土地は草が稲科の草，土地の痩せたような土地を借りていました。ところが生ゴミをずっと入れてまして，先日草が生えてきまして，それはナズナという草なんです。有機農

法をずっと30年やっておられる方で，循環農法をされている赤嶺さんという方がいまして，その方の土地の評価の仕方があるんです。稲科の草が生える土地はしたから2番目か3番目くらいの質の悪い土地なんです。その土地が半年後には，ナズナが生えるのは一番いい土地。10段階の。生ゴミを入れて一番いい土ができました。佐世保の吉田さんなんですけれども，何回も聞かされた話でした。ところが，自分でやってみて，自分のやった畑でそれができたという感動はすごいものでした。嬉しかったです。是非皆さんも自分で堆肥化するだとか，生ゴミはいい土ができますので，体験をされたほうがいいと思います。話を聞くよりも自分でやられるほうがいいと思います。それから私たちは幼稚園，小学校中心に体験型の食育を進めていきますし，また久留米大地と命の会ということで市民活動サポートセンターで毎週土曜日の2時からお借りしております。是非みなさんもおこしいただいて，ご自分で取り組みができるような，そんな活動をしていただいたらありがたいと思いますし，我々と一緒にやっていただけたら助かります。よろしくおねがいします。

境：私は，最近懺悔していることがありまして，平成7年から大木町は缶とかビンとかのゴミ収集を始めました。その時にリサイクルというのが非常にいいことだということを住民の皆さんに説明して回ったことがありました。せっせとみなさんにリサイクルしてもらってますけれども，循環型社会形成推進基本法でもリサイクルというのは最後の手段なんです。リユースというのがあって，リサイクルというのは最後の手段です。そういう意味ではリサイクル万能論を説明してまわって反省しております。リサイクルという言葉は悪いという言葉ではないと思いますけれども，最近リサイクル万能主義がまだ続いているのかなと思います。やっぱりリユースを基軸にした社会を作らないと解決にならないのかなと思います。非常に気になっていることです。以上で終わります。

河内：私はゴミを削減するのはいいことだということを中心にお話したんですけれども，法律を整備し公でやらないと，できないことがひとつあります。これは石橋さんが言われたように，拡大生産者責任といって，生産した人が出したゴミの処理責任を負うということです。その原則が日本の場合は，同じ言葉は使うけれども実際には行政と市民の負担が大きい，それをきちんと生産者に負担してもらわなくてはいけない。それと，市民ができることもいろいろあり，これにはいろんな工夫が必要です。法整備ができてないからできないということばかりではなくて，近くでやっている所としたら水俣市が有名で，大幅な資源化をやって，焼却ゴミ，その他をものすごく減らしています。それは何をやっているのかというと，生ゴミは燃やさない，雑紙ごみも燃やさない，プラスチックも燃やさない。あちこちのゴミの中身を調べて，それだけ減らしてしまうと焼却ゴミは3分の1になってしまう。すると焼却施設を造るにしても3分の1の施設でいいわけです。久留米市の場合今使っている施設を修理してだましだまし使ってゆくということを皆さん知った上で，そういう風なやり方に協力してゆく。今の段階でできることは，先ほど吉田さんが言われたように資源化できる小さな紙をゴミ箱に入れている，皆さん知らない部分があると思いますけれども，雑ゴミも資源化できるということを再確認して，燃やすゴミに入れないということをすると，もっと燃やすゴミは減ります。そのような身近にやれることと法整備の両面でやっていくことが大切だなと思います。どうもありがとうございました。

駄田井：ご静聴ありがとうございました。